

藤村久和先生と アイヌ文化研究

佐賀 彩美 (さが あやみ)

アイヌ語地名研究会

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モントレー国際大学院（現ミドルベリー国際大学院モントレー校）通訳翻訳学科修士課程修了。北海道大学大学院農学院農学専攻博士後期課程修了。全国通訳案内士。



このシリーズのもととなっている勉強会「アイヌ文化を読む会」では、藤村先生のご逝去以降、11年前に勉強

会を始めたところからの先生のご講演の録音を聞き直して学んでいます。先生がなぜアイヌ文化を研究するようになったのかや、その後のご研究のきっかけも話題とされたことがあったのでご紹介します。

藤村先生は北海道学芸大学（北海道教育大学）教育学部で学ばれましたが、学生時代の指導教授の本棚にあったアイヌ関係の文献を読み、アイヌ文化に興味を持ったそうです。その後厚田村や石狩町（当時）の小学校教員として勤務されるかたわら、アイヌ語地名研究者として著名な山田秀三氏^{やまだ ひでぞう}やアイヌ文化研究家で詩人でもあった更科源蔵氏^{さらしなげん ぞう}の勉強会に参加されていました。そのような経緯から、現在の北海道博物館の前身である北海道開拓記念館のアイヌ文化担当として関わられることになりました。

当時の展示内容は十分ではなく、特に信仰分野についての情報は沙流川付近に偏っており、道東地域のものが欠落している状態でした。そこで、道東地方の古老を中心に訪ね、聞き取りを始めたそうです。聞き取りは、忙しく働く昼間よりも夜のほうが都合がよいということになり、時には夜中の1時、2時に及び、話者のご自宅に泊めていただくことも珍しくなかったと言います。そのなかで、地域により細部の違いはありましたが、互いに交流のない人々から聞き取った生活習慣、人間と動物の関わり、神についての考え方に共通した流れがあることに気がつかったということです。アイヌの人々は遺骨の盗掘問題や研究者に都合よく利用されたという思いもあったため、心を開いて話をしてもらうのは簡単ではなく、本音を聞くのは難し

かったそうです。忍耐強く行った聞き取り活動を通じて、藤村先生は、文化は目に見えるものがすべてではなく、外から観察

しているだけでは表面的な情報しか得られないと感じられました。このようにして作成された藤村先生の調査報告書が、哲学者であり、歴史研究家としても著名な梅原猛氏の縄文時代の考察に多大な影響を与えたことは梅原氏自身が多くの著書で述べています。

梅原氏は、縄文文化は日本の基層文化であると考えていましたが、縄文人は文字による記録を残さなかったため、遺跡や遺物からだけではわからない点が多くありました。梅原氏が札幌市芸術の森開設準備のため札幌市を訪れた際、神道や仏教などの宗教以前の信仰を知りたいと要望され、藤村先生が、現在は世界文化遺産を構成する縄文遺跡の一つである千歳市のキウス周堤墓群や縄文早期からアイヌ期までの遺跡を含むウサマイ遺跡にご案内し、また、古老からの聞き取り調査報告書も梅原氏に渡しました。報告書を読んだ結果、梅原氏はアイヌ文化を通して、縄文文化に関する数々の疑問点についての答えを得られたということです。詳しくは、『アイヌと古代日本：シンポジウム北方文化を考える』^{え がみ なみ お}（江上波夫、梅原猛、上山春平^{うえやましゅんぺい} [発起]、1982年）や、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛、藤村久和編、小学館、1990年）等をご参照ください。藤村先生と梅原猛氏は、アイヌ文化が縄文文化の流れを汲むものであるということについて当時から一致しており、この見解は近年著しく進んだゲノム分析の結果にも沿うものです。日本列島の歴史においてアイヌ文化がどのような立ち位置を占めるかについては、これまで学問的に十分に研究されてきたとはいえ、進展が待たれます。

*本稿は、元北日本文化研究所代表であった藤村久和先生を講師として（一社）北海道開発技術センターが自主事業として実施してきたアイヌ文化勉強会の内容を、筆者が取りまとめたものを、藤村先生に長年師事されていた花輪陽平氏に校閲いただいたものです。

藤村 久和 氏（1940-2025）元北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般（精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等）を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践してきた。主な著書：『アイヌの霊の世界』（小学館、1982年）、『アイヌ、神々と生きる人々』（福武書店、1985年）、『アイヌ学の夜明け』（梅原猛氏との共編、小学館、1990年）、『アイヌのごはん』（監修、デーリマン社、2019年）、『平成20～令和6年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査 1～16』（北海道教育委員会、2008～2025年）等。